

# 生涯スポーツ研究

—— 車いすテニス大会参加者の意識について ——

## A Study on the Life-long Sports: Consciousness of Wheelchair Tennis Competition Participants

柴田恵美子

【要 約】 The Nagano Paralympics have aroused a great deal of interest and promoted a greater understanding of sports for the handicapped. On the other hand, current measures for disabled persons are still unsatisfactory, having a relatively short history compared to European countries.

The purpose of this study is to provide reference material for the promotion of sports for the handicapped based on survey of attitudes of wheelchair tennis competition participants.

The main results are as follows:

- 1) The fact that there are less female players and more female volunteers seems to reflect the present gender role of the society. It is hoped that there will be more female players and more male volunteers.
- 2) Disabled players tend to show less earnestness in comparison with volunteers.
- 3) Players' motivational pattern can be divided into the following three types.
  - Victory-oriented
  - Recreation-oriented
  - Not-very strongly motivated.
- 4) The increase of new mixed events in which both disabled and able play together will be one of the important factors for the promotion of wheelchair tennis.

【キーワード】 Disabled person, Wheelchair, Tennis

### I はじめに

障害者スポーツに対して、長野パラリンピック大会を機に一般の人々の関心や理解が急激に高まり、「バリアフリー」「ノーマライゼーション」といった言葉も一般化し始めている。人々が、選手たちのひたむきにチャレンジする姿と選手をサポートする関係者との暖かい「ふれあい」の映像に感動したことが端緒となったと理解される。しかし、我が国の障害者をとりまく

現状はまだまだ厳しく、障害者スポーツに関しても、幕開けとなった東京パラリンピック大会以降、まだ30数年の歴史しか刻んでいない<sup>1)</sup>。1965年に財団法人「日本身体障害者スポーツ協会」(厚生省認可)が発足して以来、毎年国体開催地で全国身体障害者スポーツ大会が開かれており<sup>2)</sup>、また、種目別、障害別の大会が定期的開催されるようになってきてはいるが、我が国の障害者のスポーツ環境はまだまだ未整備な状況と言わざるを得ない。

これまで、我が国の障害者スポーツ振興は、厚生省や都道府県の福祉部、そして社会福祉協議会等を中心に進められ、健常者のスポーツとは一線が引かれてきた<sup>3)</sup>。文部大臣の諮問機関である「保健体育審議会」は、1997年に初めて「障害者スポーツの推進」を答申に盛り込み<sup>4)</sup>、三重県でも2001年を目標に「障害者スポーツ協会」の設立を予定しているような状態である<sup>5)</sup>。

日常実施率にしてもヨーロッパの約10%に比べ、我が国では1%前後と推測され<sup>6)</sup>、「障害者スポーツ」が市民権を得るまでには至っていないと思われる。

矢部は、それぞれの人の個性や身体機能に「アダプト」(適合)させたスポーツという意味で「障害者スポーツ」ではなく「アダプテッド・スポーツ」と考えようと呼びかけ(1998.2.24付 中日新聞より)、対象を障害者に限定せず幼児や高齢者、体力の低い人であってもスポーツに参加することが可能になるという提言をしている<sup>7)</sup>。

本研究は車いすテニス大会参加者を対象に意識調査を行うことにより、その現状、傾向を把握し、生涯スポーツ、特に障害者スポーツ推進の研究の基礎資料に供しようというものである。

なお、調査方法、調査内容等の手続きは既報「一般テニス愛好者の意識に関する研究」<sup>8)</sup>に準じた。

## II 車いすテニスについて

車いすテニスは、1975年頃アメリカで始まった。これを日本に初めて紹介したのはピーター・バーウォッシュ(Peter Burwash)(米)で、1981年に3人の車いすの人に教えたのが最初とされている<sup>9)</sup>。以来、神奈川県厚木市総合リハビリセンターでは、バスケットやアーチェリー、卓球などとともにテニスを入所者のレクリエーションとして採用しており、その関係から我が国初の全国大会は1984年5月に36人の参加により同所にて行われた<sup>10)</sup>。また翌年4月には福岡県飯塚市で、6か国参加(外国人12人、日本人64人)による初の国際大会も開かれ<sup>11)</sup>、次第に普及していった。1995年には、全国で大小あわせて70もの大会が開催され、競技人口は約1000人となり、アメリカに次いで第2位を占めるに至っている<sup>12)</sup>。また1996年4月には広島市の男性(48歳)が全国で初めて一般公式戦(広島市シングルス選手権)への単独参加を認められ、二年越し

の希望を叶えた<sup>13)</sup>(1回戦敗退、ルールは日本テニス協会発行のルールブックに明記)<sup>14)</sup>。1997年9月の「全日本車いすテニス大会」(宮城)には258人の参加があり<sup>15)</sup>、普及振興の一途を辿っている。

現在、車いすテニスの種目は「シングルス」「ダブルス」の他に「ニューミックス」(アップダウンテニスともいう)という障害者と健常者がペアとなつての車いすテニス独特のダブルスがあり(障害者はツーバウンドまで、健常者はワンバウンドまでで返球する他は健常者のダブルスと同じルール)、テニスの技術の幅やふれあいの輪が広がると好評のようである。

今回調査対象とした「東海車いすテニス大会」には、ボランティア(球拾い等の他ニューミックスのペアもつとめる)として三重県中勢地区の高校生女子テニス部員(2日間で延べ84人)が参加した。これは、三重県テニス協会が前年初めて試み(それまでは高校生ボランティア部員とママさんテニスクラブの協力による)好評だったことから今回は事前に球の受け渡し方法など長年ボランティアを続けているママさんテニスクラブの人々から指導を受け、本番に望んだ。「大会報告書」<sup>16)</sup>には参加した高校生の感想もいくつか載り、彼女らにとっても貴重な体験となったようであった。

## III 研究方法

- (1) 調査期日;1997年10月25日(土)、26日(日)
- (2) 調査方法;大会会場でアンケート調査用紙(無記名)を渡し、その場で回収した。(回収率84.6%)
- (3) 対象;「東海車いすテニス第20回記念in三重県大会」の参加選手29人(男性26人、女性3人)及びボランティア、付き添い等の関係者15人(男性3人、女性12人)

\*高校生女子テニス部員とその顧問はアンケート調査対象から除いた。

- (4) 調査内容;①対象者の属性(大会での立場、性別、年齢、職業、運動経験、居住地)②活動状況(現在までのテニスの活動年数、現在テニス以外に行っているスポーツ、現在行っている文化・ボランティア活動、家族にテニス及びテニス以外のスポーツをする人の有無、練習日数及び時間、自己評価によるテニスレベル、試合経験)③5段階評価による活動意識(a)テニスを始めた理由6項目(テニスをやってみたかった、友

人等からすすめられて、なんとなく、健康・体力づくりとして、仲間との交流を得たくて、気分転換・ストレス解消法として)(b)テニスに期待すること5項目(仲間との交流、試合でよい成績をとること、技術を身につけること、気分転換・ストレス解消、健康・体力づくり)(c)現在のテニスに対する態度9項目(天候や体調が少々悪くてもテニスをする、必要があればテニスのために他の予定を変更する、練習をつらいと感じるときがある、試合に負けると悔しいし勝つとうれしい、他のことよりもテニスにかかる費用のウェイトは大きい、練習は試合に勝つためにやっている、試合には積極的に参加している、家族はテニスをすることを応援してくれている、これからもずっとテニスを続けていこうと思っている)④その他(a)大会の感想5項目(雰囲気は良かったか、運営関係者の配慮は行き届いていたか、大会の支援体制は充分だったか、親善や情報交換が充分に行われたか、次回も参加したいと思うか)(b)ノーマライゼーション、バリアフリーについて2項目(ノーマライゼーションの理念の浸透は一定の評価はできるか、バリアフリー運動の成果は一定の評価はできるか)(c)自由記述による意見、提言

#### IV 結果と考察

(1) フェースシートから；

調査対象の性別、年齢構成は表1の通りである。

① 参加選手は女性が少なく(10.3%)、男性が圧倒的に多かった。他の同質の競技会の参加比率の資料がないので一般化した考察は不可能だが、本調査に限っては、女性にとってはまだ「車いすテニス競技会」は開かれたスポーツ競技会とは言い難い。居住地は三重県17人(50.0%)、愛知県10人(29.4%)、岐阜県、静岡県各3人(8.8%)、長野県1人(2.9%)で、東海地方の選手が圧倒的に多く、三重県勢は半数を占めた。地元の選手の割合が多いのは多くの大会で見られることであるが、障害者の場合、移動手段、時間、費用等の面でより一層遠隔地への参加の条件が厳しいのではないかと考えられた。

② 選手の職業は、無職8人(27.6%)、自営8人(27.6%)、会社員7人(24.2%)、公務員4人(13.8%)、学生、内職各1人(3.4%)で、選手の就業率は

表1 対象者の性別、年齢構成一覧

年齢	選 手		ボランティア		合計
	男性	女性	男性	女性	
～24	3 (11.5)			1 ( 8.3)	4 ( 9.1)
25～29	2 ( 7.7)	1 (33.3)		2 (16.7)	5 (11.4)
30～34	3 (11.5)	1 (33.3)			4 ( 9.1)
35～39	1 ( 3.9)			1 ( 8.3)	2 ( 4.5)
40～44	1 ( 3.9)			4 (33.3)	5 (11.4)
45～49	4 (15.4)			3 (25.0)	7 (15.9)
50～54	3 (11.5)	1 (33.3)	1 (33.3)		5 (11.4)
55～59	4 (15.4)		1 (33.3)	1 ( 8.3)	6 (13.6)
60～64	3 (11.5)				3 ( 6.8)
65～	1 ( 3.9)		1 (33.3)		2 ( 4.5)
不明	1 ( 3.9)				1 ( 2.3)
合計	26	3	3	12	44(100.0)

( )内の数字は%

身体障害者の全国平均34.1%(1991年11月現在)<sup>17)</sup>に比べてかなり高く精神的・経済的余裕が伺われた。

③ 一方、ボランティアや付き添い(以下、ボランティアという)は、女性12人・男性3人(合計15人)で、職業は、無職7人(46.6%)、会社員3人(20.0%)、自営2人(13.3%)、公務員(看護婦)、パート、施設職員各1人(6.7%)であった。なお、男性ボランティアは50歳代2人・60歳代1人であったのに対して、女性は20歳代から50歳代と幅があり、特に40歳代(7人)が多かった。女性の時間的余裕とボランティア志向が推測できるし男性の社会的活動状況も伺えるが、男性ボランティアの参加が少なかったのは残念である。

(2) 活動状況の調査から；

選手・ボランティアのスポーツ・文化・ボランティア活動状況及びテニス環境の調査結果は表2の通りである。

① 選手群とボランティア群の「テニス歴」はほぼ同様の傾向を示し、4～14年のキャリアをもつ選手が大半を占めた。選手群のテニス歴は、男女1人ずつの選手を除けば、表2に示した年数が車いすテニスの経験年数であった。ボランティア群も1人を除いて選手群とほぼ同様な経験を持つテニス愛好者によって支えられている。

② 「現在、テニス以外に行っているスポーツ」は、両群とも「あり」が「なし」の1/2程度と少なく、テニス以外の愛好者が多いことが伺えた。また、「あり」と答えた選手群の実施種目はグラウンド・ゴルフが多く、ボランティア群はグラウンド・ゴルフ、水泳、ジョ

表2 活動状況及びテニス環境

調査項目	選手	ボランティア	$\chi^2$ 検定
テニス歴	なし	0	1(6.7)
	～4	10(34.5)	2(13.3)
	5～9	7(24.1)	6(40.0)
	10～14	11(37.9)	5(33.3)
15～	1(3.4)	1(6.7)	
現在テニス以外に行っているスポーツ	あり	10(34.5)	5(33.3)
	なし	19(65.5)	10(66.7)
現在行っている文化・ボランティア活動	あり	7(24.1)	4(26.7)
	なし	22(75.9)	11(73.3)
家族にテニスを する人が	いる	6(20.7)	12(80.0)
	いない	23(79.3)	3(20.0)
家族にテニス以外の スポーツをする人が	いる	8(27.6)	5(33.3)
	いない	20(69.0)	9(60.0)
	不明	1(3.4)	1(6.7)
練習日数	大会のみ	1(3.4)	0
	不定期	4(13.8)	3(21.4)
	月2	1(3.4)	0
	週1	12(41.4)	2(14.3)
	週2～3	11(37.9)	5(35.7)
週4～5	0	4(28.6)	
大会出場回数 (年間)	0	4(13.8)	2(14.3)
	2～3	11(37.9)	3(21.4)
	4～6	12(41.4)	4(28.6)
	7～9	1(3.4)	5(35.7)
	10～	1(3.4)	0
テニスレベル (自己評価)	初心者	8(27.6)	1(7.1)
	初級者	5(17.2)	5(35.7)
	中級者	14(48.3)	7(50.0)
	上級者	2(6.9)	1(7.1)

(\*P<0.05, \*\*P<0.01)

ギング、アクアビクス等であった。

③ 「家族にテニスをする人の有無」では、選手群の「あり」(20.7%) ボランティア群の「あり」(80.0%) と対照的な傾向を示し $\chi^2$ 検定1%レベルの有意差が認められ、選手の自発性が伺われた。

④ 「練習日数及び時間」については、選手群は「大会のみ」から「1日3時間、週3日」までとさまざまであったが、総じてボランティア群よりも短かった。

⑤ 「テニスレベル」(自己評価)は、選手群・ボランティア群ともに「中級レベル」と答えた人が多く、両群に有意な差は認められなかった。

(3) 活動意識の調査(5段階評価)から;

自己のテニス活動に対する意識の調査は「テニスを始めた理由」(6問)、「テニスに期待するもの」(5問)、「現在のテニスに対する態度」(9問)を5段階評価で実施し、それぞれ「どちらともいえない」と「無回

表3 活動意識

調査項目		選手	ボランティア
テニスを始めた理由	a) テニスをやってみたかった	肯定 20(69.0) 否定 5(17.2)	14(100.0) 0
	b) 友人等からすすめられて	肯定 14(48.3) 否定 7(24.1)	6(42.9) 4(28.6)
	c) なんとなく	肯定 2(6.9) 否定 9(31.0)	0 5(35.7)
	d) 健康・体力づくりとして	肯定 23(79.3) 否定 2(6.9)	11(78.6) 1(7.1)
	e) 仲間との交流を得たくて	肯定 17(58.6) 否定 2(6.9)	9(64.3) 1(7.1)
	f) 気分転換・ストレス解消法として	肯定 14(48.3) 否定 3(10.3)	11(78.6) 1(7.1)
テニスに対する態度	1) 天候や体調が少々悪くてもテニスをやる	肯定 10(34.5) 否定 9(31.0)	7(50.0) 4(28.6)
	2) 必要があればテニスのために他の予定を変更する	肯定 12(41.4) 否定 6(20.7)	6(42.9) 2(14.3)
	3) 練習をつらいと感じるときがある	肯定 4(13.8) 否定 13(44.8)	2(14.3) 8(57.1)
	4) 試合に負けると悔しいし勝つとうれしい	肯定 13(44.8) 否定 5(17.2)	10(71.4) 0
	5) 他のことよりもテニスにかかる費用のウエイトは大きい	肯定 9(31.0) 否定 9(31.0)	7(50.0) 4(28.6)
	6) 練習は試合に勝つためにやっている	肯定 7(24.1) 否定 14(48.3)	4(28.6) 3(21.4)
	7) 試合には積極的に参加している	肯定 11(37.9) 否定 6(20.7)	4(28.6) 3(21.4)
	8) 家族はテニスをすることを応援してくれている	肯定 13(44.8) 否定 3(10.3)	8(57.1) 1(7.1)
	9) これからもずっとテニスを続けていこうと思っている	肯定 22(75.9) 否定 2(6.9)	12(85.7) 1(7.1)
テニスに期待すること	仲間との交流	肯定 21(72.4) 否定 0	14(100.0) 0
	試合でよい成績をとること	肯定 10(34.5) 否定 6(20.7)	7(50.0) 1(7.1)
	技術を身につけること	肯定 16(55.2) 否定 2(6.9)	10(71.5) 1(7.1)
	気分転換・ストレス解消法として	肯定 16(55.2) 否定 2(6.9)	12(85.8) 0
	健康・体力づくりとして	肯定 22(75.9) 否定 1(3.4)	13(92.9) 0

( )の数字は%

答」を割愛して「肯定(5, 4)・否定(2, 1)」の頻数を集計したものが表3である。

① テニスを始めた理由は、選手群では「健康・体力づくりとして」(23人)、「テニスをやってみたかった」(20人)、「仲間との交流を得たくて」(17人)等が上位を占めたのに対して、ボランティア群は「テニスをやってみたかった」(14人)、「健康・体力づくりとして」(11人)、「気分転換・ストレス解消法として」(11人)が上位を占めた。選手群のテニスを始めた動機は「健康・体力づくり」と「仲間づくり」に特徴が

表4 テニスに期待することとのクロス集計

	仲間との交流	試合でよい成績をとること	技術を身につけること	気分転換・ストレス解消	健康・体力づくり
テニスを始めた理由	a b c d e f				** **
テニスに対する態度	1 2 3 4 5 6 7 8 9	** ** *	*	**	*

(\*P<0.05, \*\*P<0.01)  
(左側 選手, 右側 ボランティア) (a~f, 1~9は表3に同じ)

あると見越すことができよう。

② テニスに対する態度は、選手群では、「練習は試合に勝つためにやっている」(否定14人)ではなく、「家族の応援」を得て(肯定13人)「これからもずっとテニス続けていこうと思っている」(肯定22人)というプロフィールが浮かび上がる。一方、ボランティア群は、「これからもずっとテニスを続けていこうと思っている」(肯定12人)と意欲的なのは同じであるが、「試合に負けると悔しいし勝つとうれしい」(肯定10人)し、「練習をつらいと感じる」(否定10人)ことがないという「テニスへの思い入れ」が強く、両者のテニスに対するスタンスの違いが伺われる。

③ 「テニスに期待すること」は、選手群・ボランティア群共に「健康・体力づくり」(22人,13人)「仲間との交流」(21人,14人)であると理解される。

(4) 「テニスに期待すること」と他項目とのクロス集計から；

「テニスに期待すること」と「テニスを始めた理由」「テニスに対する態度」とのクロス集計の結果が表4である。

① 選手群、ボランティア群ともに「健康・体力づくり」を求めてテニスを始めた人は、現在も同様の期待をし、「気分転換・ストレス解消」を求めてテニスを始めた選手は「気分転換・ストレス解消」とともに「健康・体力づくり」にも期待している。

② 「テニスに対する態度」との関連では、「気分転換・ストレス解消」を求めるボランティアに「練習をつらいと感じるときがある」人がいる。

「試合でよい成績をとること」を期待する選手は、「試合には積極的に参加」し、「試合に負けると悔しいし勝つとうれしい」気持ちを持ち、「家族の応援」を得てテニスを行っている。

「技術を身につけること」を期待する選手も「試合には積極的に参加している」ようである。

一方、ボランティア群の「練習は試合に勝つためにやっている」人は「健康・体力づくり」には期待せず、「仲間との交流」を期待している人は「これからもずっとテニスを続けていこうと思っている」と考察される。

(5) その他の設問について；

① 大会については「大会の雰囲気よかった」(75.0%)、「運営関係者の配慮が行き届いていた」(81.8%)、「大会の支援体制が充分だった」(70.5%)、「大会参加者の親善や情報交換が充分行われた」(63.6%)、「次回も参加したいと思う」(77.3%)とおおむね好評であった。

② 「ノーマライゼーションの理念の浸透は一定の評価はできる」「バリアフリー運動の成果は一定の評価はできる」については、肯定18.2%・どちらともいえない34.1%~38.6%・否定9.1%~11.4%・無回答34.1%~36.4%という結果で、「まだまだ満足できる状態ではない」とする意見に集約できる。また、意味が分からないとの付記や、どういう意味かとの質問もあり、行政や報道のかけ声のわりに当事者たちには実感が薄いのではないかとも思われた。

③ 自由記述では、「ボランティアに感謝」「もっと多くの人、若い人の参加を」「シニアクラスを設けて欲しい」「存在のP・Rと技術向上のクリニックを」「大会の費用補助、コート使用への障害者割引を」「駐車場の入り口がわかりにくい」「行政の協力不足(来賓の欠席、資金補助なし等)」「頭の固い行政より民の力の導入をもっと」「何事にも障害者自身の声をもっと取り入れてほしい」「遠出する時等の情報不足」「バリアフリーという言葉をやたらと使いすぎる」「一般の人々の無理解(車いすマークのあるところへの駐車等)」等様々な思いが書かれており、これからの課題の幅広さと奥深さを痛感させられた。

今後の障害者スポーツ発展のためには、施設の充実、指導者・ボランティアの育成、財源の確保、「縦割り

行政」の改革等問題が山積している<sup>18)</sup>。また、リハビリやレクリエーションから競技スポーツまで、幅広い対応も求められよう。しかし、これらはすべて「生涯スポーツ」と共通のものであり、矢部の提唱するアダプテッド・スポーツにつながるものと思われる。

今後も「車いすテニス」の調査を重ねて、動向と課題を浮き彫りにしたい。

## V まとめ

(1) 女性選手の参加者が少なく、女性ボランティアが多いのは、現在の社会情勢を反映しているように思われ、今後、女性選手、男性のボランティア・付き添い等の増加が望まれる。

(2) 選手群のテニスを始めた動機は「健康・体力づくり」と「仲間づくり」に特徴があり、ボランティア群に比べ、テニスに対する強い思い入れやこだわりが少ない傾向が見られた。

(3) 選手は、「試合出場の回数が多いなど、積極的にテニスに関わり技術・勝利志向も強いグループ」と、「気分転換・ストレス解消や健康・体力づくりを求めてテニスを始め、現在も同様の期待を持ってテニスを続けているグループ」、「動機も期待も弱いグループ」の3つに分類できる。

(4) 障害者スポーツの振興は、一般健常者のそれと表裏一体であるべきであり<sup>19)</sup>、双方が入り交じってスポーツを楽しむことが理想と考えられる<sup>20)</sup>。テニスにおけるニューミックス種目は、この点で新しい方向性を見いだせるのではないだろうか？

## 付 記

調査にご協力頂きました対象者の皆様、及び本論文に際して貴重なご意見を賜りました深瀬吉邦教授（中央大学）に心より感謝を申し上げます。

## 文 献

- 1) 芝田徳造：障害者とスポーツ，P.14，文理閣，京都，1992.
- 2) 赤嶺卓哉，他：車椅子マラソン，P.67-68，不昧堂出版，東京，1997.

- 3) 山口泰雄：生涯スポーツとイベントの社会学，P.133，創文企画，東京，1996.
- 4) 水口長編：障害者スポーツ，月刊切抜き体育・スポーツ，292，83，1998.
- 5) 三重県：三重のくにつくり宣言第1次実施計画，P.68，三重県，1998.
- 6) 芝田徳造：障害者スポーツの現状と問題点，日本体育・スポーツ経営学会第20回大会シンポジウム抄録・資料集，8，1997.
- 7) 矢部京之助：アダプテッド・スポーツと障害を持つ人の体力特性，東海保健体育科学，19，1-2，1997.
- 8) 柴田恵美子，他：一般テニス愛好者の意識に関する研究，スポーツ方法学研究，10，117-124，1997.
- 9) 松枝禮：新テニスの科学，月刊テニスジャーナル，178，55，1998.
- 10) 水口長編：障害者スポーツ，月刊切抜き体育・スポーツ，136，43，1985.
- 11) 水口長編：障害者スポーツ，月刊切抜き体育・スポーツ，133，56-57，1985.
- 12) 水口長編：障害者スポーツ，月刊切抜き体育・スポーツ，258，61，1995.
- 13) 水口長編：障害者スポーツ，月刊切抜き体育・スポーツ，265，60，1996.
- 14) 姫田義也編；コートの友，P.285，日本テニス協会，東京，1997.
- 15) 池田郁雄編：トピックス，テニスマガジン，479，116，1997.
- 16) 石川肇：東海車いすテニス第20回記念in三重県大会報告書，P.9-13，三重県車いすテニス協会，三重県，1997.
- 17) 厚生統計協会編：国民の福祉の動向，厚生指針，691，179-180，1997.
- 18) 芝田徳造：障害者とスポーツ，P.129，文理閣，京都，1992.
- 19) 大谷義博，他編：生涯スポーツの社会学，P.114，学術図書出版社，東京，1997.
- 20) 芝田徳造：障害者とスポーツ，P.27，文理閣，京都，1992.